

# 新・マリアの父親

たくきよしみつ

子どもの頃、他のすべての人間が死んでも、自分だけは不死なのだと思おうとしていた時期がある。

レントゲン写真を撮ってみると、自分の身体は人間ではなくて、サイボーグだと分かるのではないか。あるいは、神様が僕だけを特別に選び、奇跡を約束してくれているのではないか。

少し成長すると、今度は、世界中で本当に生きているものは自分だけで、周囲に見えるすべてのものは神様が僕に見せている幻影なのではないかと疑うようになった。

「世界」は自分の周囲数キロ半径しかなくて、その外側は空っぽ。僕が東へ五メートル移動すれば、「世界」も僕と一緒に五メートル移動する。自分以外のすべての人間は、神様が僕のために創った人形で、本当に生きて「存在している」のはひとりだけ。

そうした幻想が消えたのは、小学校入学後まもなく、初めて父の職場に足を踏み入れたときだった。父は鰻屋の職人だった。

厨房に案内された僕は、樽の中で絡み合うように泳いでいた鰻が、父の手によって割かれ、蒲焼きになる

までの一部始終を見た。

記憶にある限り、命が食物に変わる過程を見たのはそれが初めてだった。

そしてつい数分前まで生きていた鰻の肉を口に含んだ途端、自分も鰻も同じなのだという現実を舌の先を通して学んだ。

それ以後、僕は少しずつこの世界に同化していった。

自分もあの鰻と同じで、首に太い釘を打ち付けられれば今すぐにでも死んでしまう存在なのだ。そう認めるのは怖かったけれど、大人になるにつれ、その恐怖を直視せずに生きる術も身につけた。

「世界」はやっぱり存在するのだろうし、僕の周囲の人間たちも、人形ではなく、それぞれ僕と同じように意識し、生きている。

世の中が、テレビのニュースで言っているようなものなのだろうということも素直に信じたし、この国の教科書が教える「世界の歴史」の内容にも、何ら疑いを抱かなかった。

そうして、僕は順調にこの「石油文明社会」の一員に成長していった。

しかし、その同化の仕方は間違っていた。

僕は今、「世界」の真相について、再び疑いを抱き始めている。

僕が知っていたつもりの「世界」は、情報の集積でしかない。そして情報は無気質な現実ではなく、ある種の「意志」を持つことがよくある。

そんな簡単なことに、「従順な社会の構成員」たちは気づいていない。

僕にそのことを気づかせてくれた二人の教師について、これから語ろうと思う。  
時間は一九八八年に遡る。

僕の間ではほんのちよつと前のことだが、まだ、携帯電話ケータイもデジカメもなかった頃だ。

## I

「イルカとの対話集会」コミュニケーション・ウィズ・ザ・シー」と題されたその妙な集会は、高知県の土佐岬で行われた。

岬の突端近くに小さな砂浜がある。アカウミガメの産卵地ということになっていて、一応は観光ルートにも入っているのだが、もう夏休みも終わり、浜を訪れる人はほとんどいなかった。

集会の主催者は「山彦塾」といい、奇抜なパフォーマンスを通して自然保護や原発を訴える集団としてマスコミでも最近注目を集めている。

彼らが、なぜこんな時期にこんな場所を選んだのかは分からない。その話を聞いたときは、はたして人が集まるのだろうかという疑問がまっ先に浮かんだ。

しかし、僕が海岸に着いたときには、すでに結構な人が集まっていた。その数、およそ百人というところだろう。中には取材記者らしい人たちの姿もあった。

波打ち際を背に作られたステージでは、最近ではあまり見かけなくなった半袖のサファリジャケットを着

た若い男が、原発の危険性について熱弁をふるっていた。

僕は目立たぬように聴衆のいちばん後ろに少し距離を置いて加わり、砂浜に腰を下ろした。

男の話は小一時間続いた。ようやく話が終わると、司会役らしい、長いストレートの髪の女性が現れ、少しこわばったような笑顔でアナウンスした。

「それではここで、山彦塾の塾頭・山彦彦による、イルカとの音楽対話を行いたいと思います」

ヤマサチヒコと呼ばれた、顔の半分を髭で被われたその男は、ステージの上に立つと、マイクの前で、おもむろにオカリナを構えた。

予期していたよりもやや甲高い、硬質な音が海岸に流れ出した。

PA装置を通じたためにオカリナ特有の音の丸みが消えてしまっているのが残念だったが、音楽としてはそう悪くないものだった。

メロディを追いかけっていると、波打ち際から十メートルほど離れた海面で、ふいにイルカが一頭ジャンプした。砂浜に座っている観客からどよめきが上がった。

さっきの女性が言った「イルカとの音楽対話」というのはこういうことらしい。

しかし、イルカは別にオカリナの音に引き寄せられて沖からやってきたわけではない。よく見れば、海岸に沿って十数メートル四方の生け簀が造っており、最初からそこに「用意」されていたものだ。

髭男はそのイルカのほうを向き、大袈裟なジェスチャーで、語りかけるようにオカリナを吹き続けた。

イルカが何度か短く声を発した。ステージから少し離れた波打ち際は、トレーナーらしき「黒衣」が、控え目な動作でイルカに合図を送っている。

「サブちゃんも大変やなあ」

そばで独り言のような呟きが聞こえた。

声の主は、僕の斜め前方に座っていた細身の男だった。その隣には、連れらしき若い女が、両手を腰の後ろに突き、足を投げ出して座っていた。

男の向う側なので顔はよく見えなかったが、すらりと伸びた手足の白さと、緩やかなウェーブがかかったボリュームのある黒く長い髪が目を引きいた。

僕は一瞬にして彼女に強い興味を持った。

サテン地のような紺のワンピース。その腰から下は砂にまみれている。

彼女はステージには目もくれず、イルカの姿だけを追っていた。

山幸彦のオカリナ演奏が終わらぬうちに、彼女はマリオネットのようにふわりと立ちあがり、海に背を向けて歩き始めた。

一瞬見えた横顔は、想像していた以上に整っていた。

僕の彼女への興味は、ときめきに変わっていた。

連れの男は彼女の背中を目で追いながら、シャツの胸ポケットから禁煙器具のようなものを取り出してくわえ、うまそうに二、三回息を吸い込んだ。

海では、イルカがまた哀切な声を上げた。それに合わせ、男は軽い溜め息をついたが、席を立つ気配はなかった。

もしかしたら、この男はたまたま彼女の隣に座していただけで、二人は何の関係もないのだろうか。

僕はゆっくり立ち上がると、女を追う形で会場を後にした。最後まで集会を見届ける気はなかったし、彼女が立ち上がったのがちょうどいい合図のような気がした。

空には星がいくつも見え始めていた。

数十メートル先に行く女の紺のワンピースが、暗くなりかけた周囲の空気の中で、ひときわ鮮やかに浮かび上がり、まるで僕を先導しているかのようだった。

ふと「ブルキニエ現象」という言葉を思い出した。

朝晩の薄暗闇の中では、赤系統のものはくすんで見え、青系統のものは鮮やかに見える、という現象のことだ。中学の美術の時間に、菊地先生から教わった。夕方見かける制服の女子学生が眩しいのはそのせいかと、妙に納得したのを覚えている。

女は海岸沿いの道路に出て、松林のそばに駐車している暗色のワンボックススクアーの前まで行って止まった。レジャー用のワンボックススクアーよりは一回り大きく、色が暗いせいもあるが、囚人護送車のように見える。

先導役が止まってしまったので、僕も足を止め、道端に立ち尽くしたまま彼女を見ていた。

彼女は後部座席のスライド式ドアを開け、開口部の床に座り込んで、両脚を真っ直前に投げ出した。どうやら脚を投げ出して座るのが癖らしい。

「今夜は一雨くるかもしらなあ」

ふいに背後で声がした。振り向くと、さっきの長身の男だった。

彼の連れらしき女を離れた場所からじっと見つめていたのを知られて、僕はその場をどうとり繕ったらいいかわからず、慌てた。

「星が出てるのに、何を妙なこと言うちよるんや思つてまっしやる？ じゃっどん、あたいにゃ分かるのさあ、ハハハン、フフフン、ホロホローン……」

一体どこの出身だか分からないような滅茶苦茶な言葉。おまけに、異様な節回しでハミングまでし始めたこの男は何者なのか。

小さなパンダとコアラが交互に並んでいる柄の黄色いシャツの趣味は尋常ではないが、派手な指輪をしているとか、先の尖ったエナメルの革靴を履いているといった、いわゆるヤクザファッションとも違う。

年齢もよく分からない。三十代だろうか。どこか無国籍風の風貌。もしかしたら日本人ではないのかもしれないとも思つたが、言葉遣いが滅茶苦茶なわりには、アクセントやイントネーションは外国人風ではない。呆気にとられている僕に向かって、男はさらに話しかけてきた。

「お兄さん、哲学者だねえ。オイラにゃ分かるよ。何も言わなくて、私にはよおーっく分かるの」

一人称がコロコロ変わる。無意識にそういう話し方になっているのだとしたら、やはり普通ではない。

「兄さん、悩んではるね。言ひ様のない虚無感に襲われとるぎゃあ。感受性が強いんやねえ。温もりが欲しい。嘘のない優しさが欲しい……そうでしょ？」

男は青いメタルの丸眼鏡の奥で、虹彩の小さな目を光らせながら言葉を続けた。

僕はその唐突な問いには答えず、視線を女のほうに戻した。

彼女は相変わらず両脚をまっすぐ投げ出して車の床に座っていたが、僕と視線が合うと、妖しげに微笑んだ。「ブルキニエ現象」で周囲の薄い闇から浮き上がる紺色のワンピース以上に、その微笑みは眩しかった。

「マリアって言いますのんや。ええ子でっせえ。きつとお客はんのデリケートな心も、しっかり包んでくれる

思いますワフ」

「お客さん？」

僕は思わず訊き返した。

「あいやあ、失礼。兄さんとあんまり心がびつたり通いおうてしもたんで、口が滑っちゃった。いやだわ、アツパトツパするよねえ、いきなりこんなふうに話しかけられたら。アタシだつて信じられないんだわさ。ホント。こんなところで兄さんのような哲学的な人に会うなんてさ」

「哲学的？ 僕はただのコックですよ。この先のホテルの」

「いや、職業は関係ないの。問題は心ね。ボクたち、心のきれいな人しかお客さんを選ばないから」

「お客さんつて……どんな商売してるんですか？」

すでに多少の予測はついていたのだが、思いきつてそう訊いてみた。

男は小さな目を細くして微笑むと、待つていましたとばかりに続けた。

「心を包んで、地球を共感する仕事ですワ。いや、あんなしょうもないイルカショーとは違いまっせ。インチキはなし。精一杯の思いやりと温もりを通い合わせるべく、誠心誠意、努力させてもらうてます。人間は御飯だけ食べて生きてればいいつてもんでもないでしょ？ 何かと一体になりたい。心の底でいつもそう願うておつても、ほんまもんのコミュニケーションちゅうのは難しいわけで……」

「すみません。何を言っているのかよく分かりません。具体的にはどういうことですか？」

放っておけばいつまでも喋り続けそうなので、相手の言葉を遮るに足りる程度に、はっきりした口調で訊いた。

「はいな。具体的に……ね。マリアちゃんは特殊な才能の持ち主ですね。人を幸せにする才能を持つとるんですよお。これにかけてはもう天才じゃき。聖母マリアもかくあるやと思わせる懐の深い温もり……あ、お客さん、具体的な表現がお好みなんよね、ハイハイ。具体的にはですねえ、絶対に暴力は駄目。せやけど決して損はさせませんよって、二万円ポツキリで、どうぞです？」  
やはりそうだったのか。

要するに、極めて風変わりではあるが、ポン引きなのだ。それにしても、新宿の雑踏や熱海の温泉街ならいざ知らず、四国の海岸の、しかも自然保護団体のパフォーマンスショーの会場になぜ？

「そんなつもりは全然ないし、今、持ち合わせもないから……」

そう言った後で、もっと強い拒絶の仕方をすべきだったと後悔したが、男はあっさり引き下がった。

「そうよねえ。ちよつと無理があるよねえ。分かっただけだ、ちよつこしお願いしてみただけじゃけん、気にせんといてえな」

男はそう言うと、別れの挨拶代わりにか、軽く右手を挙げた。

車のほうを振り向くと、女はまだこつちを見て微笑していた。

二、三秒間、僕は無言で彼女の笑顔を見つめていた。

彼女の笑顔は、僕が知っているどんなタイプの美人のそれとも違っていた。その意外さが妙に心地よい。

しかし、一方では、今、男と交わした会話からくるある種の偏見と軽蔑が、その素直なときめきを曇らせていた。

心が混乱したまま、仕方なく男から離れ、ホテルに向かって歩き始めた。

車の横を通り過ぎるとき、女がそつと声をかけてきた。

「いめんなさんね」

「ごめん」

反射的にそう返事をしながらも、何か後ろ髪を引かれる思いで、うつむき加減に彼女の前を通り過ぎた。

顔の識別ができないほどの距離になつてから振り返ると、二人はさつきと同じ位置で、同じポーズのまま僕を見送っていた。

▽

シーサイドホテルニュー土佐という長い名前の観光ホテルは、そこからさらに十分ほど歩いた場所にある。規模は小さかったが、この辺には民宿が数軒あるだけで、観光ホテルと呼べるようなものは他にはない。

二年前に建てられたそうで、外観はきれいだったが、真夏の最盛期でも満室になることは滅多になく、早くも経営を心配する声がホテルの内外で上がっている。

その日も客はあまりいなかった。

九月に入ったばかりの平日だし、ほとんど開店休業状態でもおかしくはないのだが、あの集会への参加者の一部が泊まっているのだろうか、何部屋かの予約が入っていた。

厨房や配膳室ではいつも通りの作業が行われている。

昨日まで、僕もその中にいた。厨房の大鍋で客の人数分の味噌汁を作り、海老フライを揚げていた。だから夕方この時間、厨房の外にいるのがなんとも落ち着かない。

支配人に辞めたいと言ったのはつい昨日のことだ。ちょうど二三歳の誕生日だった。

彼は別段慌てるふうでもなく、「じゃあ、切りがいいから今日付けで辞めてよ。残りの給料は明日の夜までに用意しておくから」と答えた。

夏休みも終わり、これから暇になる時期だし、向こうとしてはいいタイミングだったに違いない。

毎週月曜の午後、彼は土佐市の銀行へ行き、金の出し入れを済ませ、社長のところは一週間分の収支報告をする。帰り道、愛人の所へ顔を出し、決まって夜の十時に戻ってくる。

そんなわけで、僕は彼が金を持って戻ってくる夜十時までは、時間を潰しながらここで待っていないければならなかった。客でもなく、従業員でもないという立場でホテルにいるのはひどく居心地が悪い。

こんなことなら、無給でもいいから、今夜は最後の仕事をするべきだった。チーフにもそう申し出たのだが、客もあまりいないからいいと、あっさり断られてしまった。それで、時間潰しに、近くの海岸でやっているという妙な集会を覗いてみる気になったのだった。

夕食後、一応みんなに挨拶をしに回った。

配膳室では仲居の有紀さんが客の食べ残した料理を片づけていた。僕の顔を見るなり、彼女はまるで咎めるような口調で言った。

「てっちゃん、辞めるんだって?」

「は。昨日付けでもう……」

僕はちよつと口ごもりながら答えた。

有紀さんは、まだかすかに動いている鯛の活き造りを、無造作にポリバケツに放り込んだ。高額コースの客の夕食にはこれが出るのだが、中にはまったく箸をつけない客もいる。そうしたきれいなまま戻される活

き造りを、仲居さんたちは「犬死皿」と呼ぶ。魚なのに犬死……。魚にも犬にも失礼だ。

「寂しくなるね」

有紀さんが手を休め、まじまじと僕の顔を見つめた。

「ええ。いろいろお世話になりました」

僕はありきたりの挨拶を返した。厨房はすでに掃除も済み、チーフが一人で残っていた。

なぜか彼は板長とかコック長ではなく、「チーフ」と呼ばれていた。

もともとは料亭の板前だったそうだから、安っぽい横文字で呼ばれることを快く思っていないのではないかと想像するのだが、口数の少ない彼からそういう愚痴を聞くことは一度もなかった。

「どうだった? ナントカって集まりは」

チーフは僕の顔を見るなりそう言った。

この人が自分から先に口を開くことは珍しい。別れの挨拶を意識した会話をしたくなかったのかもしれない。

「訳の分からないイルカショーでした」

「イルカか……。あれは美味い。新鮮なうちなら刺身がいちばんだな」

彼はそう言いながら、厨房の隅に置かれた鯛の水槽に目をやった。そこには近日中に活き造りにされる運命の鯛が十数匹、窮屈そうに泳いでいる。

「お世話になりました」

「別に……」

チーフはそつげなくそう答えた。彼にはもう少し何か言わなければならぬという気がしたが、適当な言葉が思いつかなかった。

「それじゃあ、失礼します」

「ああ」

結局昨日までと同じ挨拶を交わし、僕は厨房を後にした。

▽

支配人はいつも通り、十時ちょうどに戻ってきた。

支配人から金の入った茶封筒を受け取ると、僕は封筒の中身をちゃんと確かめることもせず、小銭だけ財布に入れ、残りの札は封筒に入れたままズボンのポケットに押し込んだ。

部屋に戻り、すでにまとめてあった荷物を持ち出して自転車の荷台に括りつけ、海沿いの道へと出ていった。なにも夜中に出ていくことはなさそうなものだが、居心地の悪さがピークに達し、一刻も早くこのホテルから遠ざかりたかった。

町まで出れば、一人でも入れる二四時間営業のラブホテルがある。そこで少し眠って、朝一番の列車に乗って東京に向かうつもりだった。

そのとき、雨が降り始めていることに気づいた。空を見上げると、真っ暗だった。夕方海岸で見た星のことと、長身の妙な男が言っていた言葉を思い出した。

「星が出るのに、何を妙なことを言うちよるんや思うてまっしやる？　じゃっどん、あたいにや分かるのさあ、ハハハン、フフフン、ホロホローン……」

あの男が言っていた通りだ。

ほとんど走りぬうちに、雨は本降りになり、遠くで雷鳴まで聞こえ始めた。

仕方なくホテルに引き返そうとしたとき、前方の道端に夕方会った奇妙な二人組の車が停まっているのが見えた。

脇に自転車を止め、中をそつと覗いた。

運転席には誰もいなかった。後部の窓はカーテンがかかっている、中の様子は見えない。

「お金ができたんですけど」

そんなふうに言えば、彼らほ今からでも僕を「客」として迎え入れてくれるだろうか。

この雨の中で、ずぶ濡れになったままあの女と抱き合う自分を想像してみた。

……バカな！

なんとという想像をしているんだ。警戒心を抱くのが普通ではないか。

怪しい二人組、ポケットの中にはひと月分の給料が入った封筒、ひとけのない闇夜……犯罪の御膳立てはすべて揃っている。

そう思ったとき、横の松林の中で懐中電灯の灯りが揺れ、人が息を切らして近づいてくる気配がした。

あの二人だった。

「やっぱ油を入れて、逃げる用意をしたらのほうがよかったんちゃうか？」

「でも、このへんガソリンスタンドなんかないよ。それにこんな時間だし」

「ほなら逃げられへんやんけ」



二人はそんな会話を交わしながら車に乗り込もうとし、突っ立っている僕に気づいた。二人は相当驚いたようで、一瞬身体をこわばらせたのが分かった。

そのとき、女が持っていた懐中電灯の光が車に反射して、男の手元がかすかに見えた。

僕は鼓動が止まるほどの戦慄を覚えた。男の手には、刃渡り一五センチもあるうかというナイフが握られていた。

逃げなければ！

そう思い、自転車のペダルに足を掛けた途端、緊張と雨のために足が滑り、僕はその場に思いきり転倒した。

「大丈夫？」

女が駆け寄り、上から覗き込む。

「あら、さつきのお兄さん？」

「どうしたんや。平気か、兄さん」

男も近づいてきた。右手にはナイフを握ったままだ。僕は必死で身体の上に被いかぶさっている自転車をどけて立ち上がろうとしたが、右足に痛みが走って動けなかった。

しかし男は襲ってはこなかった。

ナイフを運転席に置くと、自転車をゆっくり起こしにかかった。

「大丈夫？」

女の手が、僕の右足に触れる。

「血が出てるわ」

どうやら自転車のどこかに足を引っ掛けて脛を切ってしまったらしい。しかし痛みはむしろくるがしに集中している。捻挫したらしい。

男の手を借りてなんとか立ち上がり、とりあえず車の後部の床に腰を下ろした。

男が車のルームライトをつけた。

「痛い？」

女が心配そうに覗き込む。

紺のワンピースは雨に濡れて身体にびったりとまとわりつき、まさにさつき僕が想像していた姿だった。そんな彼女の艶めかしさに息をのみながらも、頭では自分が襲われる可能性について計算し続けている。

緊張と興奮とで、僕の身体は軽く麻痺し始めていた。

「傷の手当てをしなくちゃ」

女に招き入れられる形で、僕は車の後部座席に座らされた。

ルームライトに照らされた車内は、実に奇妙な造りだった。

運転席の後ろには薄い壁が作られていて、壁には横長の窓が開いていた。窓にはカーテンが付けられていて、これを閉じれば運転席と後部荷室の空間はほぼ完全に仕切られる。

後部荷室は最後部の片側に小さな補助シートが一座残されただけで、他のシートはすべて取り外され、代わりに僕が今座っている簡易ベッドのようなものが縦に取り付けられている。

どう考えても普通の改造ではなかった。車を使った移動売春……僕の頭の中で、薄暗く、重苦しいイメージが広がった。

「兄さん、やっぱり戻ってきはったね」  
外から男が声をかけた。

「いえ、僕はただ町まで行く途中で……」

「町に行くの？ じゃあ、乗ってつてよ。でも、ガス欠でさ。軽油ないかのう。あ、灯油でもよろしいで」

「あ、あります……」

「え？ ほんど？」

女が嬉しそうな声を上げた。

「はい。ホテルの裏の灯油タンクに……」

なぜそんなことを言ったのか、よく分からない。しかし、とっさにそう答えてしまっていた。

「よっしゃ、決まり！ その灯油が代金代わりや。やっぱり兄さん、頼りになるやんけ」

「ほんと、救いの神だわ」

そう言うと、女は濡れた身体で僕を抱きしめ、唇を重ねてきた。

舌先に、柔らかな温もりが伝わってくる。雨の滴なのか、彼女の体液なのか分からないまま、僕はその甘い潤いの快感に圧倒されていた。

「マリアちゃんの温もり、伝わりますやろ？ そのささやかな温もりで灯油二リットルばい。オイラ、とつてくるさかい、場所を教えてえな」

僕は仕方なく、男に灯油タンクの場所を教えた。

男は僕の自転車の荷台から荷物を下ろすと、代わりに小さなポリタンクを括り付けて、雨の中をホテルの

方に走り出した。

あとには僕と女が残された。

女は補助シートの脇の木製ケースから、タオルを一枚取り出した。

「脱いで」

「え？」

「びしょびしょ。脱がなくて風邪をひくわ。脱いだらこれを着て」

女は屈託のない笑顔で、タオルと一緒に木綿のガウンを差し出した。

女の手が僕の胸元に伸び、シャツのボタンを一つ一つ外し始めた。その慣れた手つきが、脳裏に広がっていた暗いイメージに追いつきをかけた。

「やはり「プロの女」なのだろうか……」

しかし、そんな僕の心の動揺とはまるで無関係に、彼女はてきばきと僕のシャツを脱がせ、タオルで濡れた身体を拭き始めた。

偶然の出会いに対して勝手に抱いていたときめきと、「プロの女」という偏見が適度に中和された上で、僕は急に、このまますべてを彼女に委ねたい衝動に襲われた。

乾いた木綿の肌触りと、時折触れる彼女の指先の感触に負けただけかもしれない。

捨てばちの疲労感……。

僕は覚悟を決めた。こんな訳の分からない状況の中、多少計算したところで始まらない。ここで殺されたとしても、それはそれで運命だ。いや、ひよつとしたらこれは長くてリアルな夢なのかもしれない。

思いきってズボンも脱ぎ、ガウンを羽織った。

よく見ると、ガウンには大きく「二人の秘密」と書かれている。どこかのラブホテルの備品を持って来たのだろう。

「ピンクのと青のと二つあるんだけれど、青いほうがよかった？」

女が言った。もちろんどっちだっていい。第一、暗くて色なんかよく分からない。

「贅沢は言いませんよ」

余裕を装って、僕はそう答えた。

女はニツコリ笑うと、血がにじんでいる僕の脛を消毒し始めた。消毒液が少し沁みた。

濡れたワンピースの襟から、雨の滴がついたままの白い胸元が覗いている。しかし、もちろん僕には欲情するほどの余裕はまだない。

錯綜した気持ちで女の胸元を見つめているうちに、傷の手当は終わっていた。

冷静さを装って、こう言ってみた。

「あなたも脱がないと風邪ひくんじゃないですか？」

「うん。じゃあ、私は青いのを着るわ」

女は中腰のまま車の後部に行くと、僕の服を脱がせたよりも手早くワンピースを脱ぎ、ガウンを羽織った。薄暗がりの中で、柔らかそうな乳房が揺れるのがかすかに見えた。

しばらくして男が戻ってきた。うまく灯油を盗み出せたようで、給油口を開け、灯油を入れている気配がする。

給油が終わると、男は僕の自転車を車の後部キャリアにくくりつけた。

やがてエンジンがかかる音がして、車が揺れた。

……ああ、もう逃げられない。

ゆつくりと車が動き出す。

運転席から。はははん、ふふふんという男の鼻歌が聞こえてきた。

ガウンをまとった女が、僕の隣に寄り添うようにして座ってきた。

「あの……さつき、一体何をしていたんですか？」

そう訊いた自分の声がかすれていた。ひどく喉が渴いていて、声を出すと声帯が痛む。

それに気づいたのか、女は返事をする前に物入れの申から何やら瓶を取り出し、栓を開けて差し出した。

警戒心より喉の渇きが勝っていた。受け取った瓶の中身をラッパ呑みする。

液体が喉元を通り過ぎてからしばらくして、ようやく赤ワインだということに気がついた。

「お水が切れちゃってて、これしかないの。お金がなくなっちゃって、何も仕入れられなくて……。油貰えて、本当に助かったわ。あ、油の分、ちゃんとお礼をしなくちゃね」

そう言うとき、女は僕の肩に手を回し、身体を寄せてきた。その身体は僕よりもさらに冷えきっていた。

純粋な肉欲と、その身体の冷たさへの愛しさが入り混じった気持ちで、僕は彼女の身体を抱きとめた。僕の身体に蓄積された微熱が、木綿のガウンを通して、少しずつ彼女の側に移っていく気がした。

体温を奪われているはずなのに、なぜか身体も心も温まっていく。気持ちがどんだん安らいでいく。

車は細く曲がりくねった道をゆつくりと走り続けていた。国道に出るまでは、他に道はない。窓の外は見